

---

# 過去の鎖

白雪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

過去の鎖

### 【Nコード】

N9902X

### 【作者名】

白雪

### 【あらすじ】

この世界には、“魔”と呼ばれるものが存在する。人の心の闇や傷から生まれ、人を更なる暗がり突き落とす。一般の人間には知られていないが、狂ったように暴れだしたり、突然大きな罪を犯したりする人たちの中には、その“魔”に憑かれた人間が多々居る。「福集屋R」という探偵事務所の調査員をしている二人の少女、霧島希と澤井心愛にはその魔を見て、払う力があつた。そして、復讐代行業も兼ねている福集屋Rには魔に憑かれた、もしくは憑かれかけている人がたくさん訪れる。

そんな福集屋Rの元に一人の依頼人が訪れた。彼、斉藤仁を見た希達は目の前が真っ暗になるほどの強い衝撃を感じた。彼は、六年前希達の担任教師であり、ある事件に巻き込まれて殺された斉藤心と良く似ていた。まるで既に居ないはずの心が生きて再び彼等の元に表れたかのような錯覚さえも与えるほどに。しかも、仁が依頼してきた内容は希達が隠し、蓋をし続けてきた六年前の事件の真相を知ること。だが、その6年前の事件が再び希達を襲う。これは、彼岸花の事件から約6年後、希と心愛が高校2年生になったころの話です。彼岸花の続編では有りますが、彼岸花を読んでいなくても読めると思います。

## 序章 プロローグ（前書き）

彼岸花の続編を始めました。シリーズとはいえ前作を読んでも問題なく読めると思います。楽しんでいただけたら幸いです。

## 序章 プロローグ

「心愛！！」

青白い顔でコンコンと眠り続ける親友の顔を、見つめる霧島希の顔は、心愛よりもまだ青ざめているように見えた。

誰もいない部屋に、何度も、何度も目を醒まさない親友の名を呼び続ける希の声が響いている。

「……ねが……。目を……醒まして……」

強く、強く願う声が部屋に響き渡る。

心愛は、希にとって何よりも大切な友人だった。辛い出来事を共に経験したためか、希が心愛を思う気持ちは強い。

心愛が、目を醒まして、笑ってくれるなら悪魔に魂を売ってもいい、と強く願った、その時、突然周りから景色が消えた。比喻ではなく実際に。心愛の姿も、彼女の部屋も、ドアも何もかもが視界から消えて、真つ暗な空間に希はいた。

《お前の願いは……なんだ？》

聞覚えの無い声と共に、見覚えの無い人間が目の前に立った。希はまるで、夢の中の出来事であるかのように、彼の顔を見つめた。

「はあ〜〜」

溜息と共に家に帰って来た斉藤仁は何故か一足先に我が物顔で部屋でくつろいでいる女性に再び溜息を吐いた。今日はいい事が無い。

「千里。どうやって入ったんだよ。鍵、かけといただろ？」

に〜！と笑った千里がポンと机の上にキーホルダー付きの鍵を投げ出した。見覚えの無いそれをにらみつけた仁は、直に一つの可能性に気がついて盛大に顔を顰める。

「家の合鍵か？何時の間に作ったんだよ」

「まーまー。きにしない。それより今日も駄目だったんだ」

その言葉に仁は、呆れたような眼差しを悲しげにゆがめて頷いた。仁は、毎日のように様々な探偵事務所に足を運んでは意気消沈して帰ってくる。こんな風に自由に自由に出歩けるのも後一週間。仕事が始まるまでの間だ。それなのに今日もまた何の成果も上げられなかった事に強い焦りの思いが浮かんだ。

「ああ。・・・やっぱ、6年前に警察がさじを投げた事件を調べてくれるようなところは無いのかもな」

諦めたような、それでいて諦めきれないような表情の仁を見た千里が仁の前に一枚の名刺を差し出した。

「何だ？」

ツイツと不機嫌そうに顔を顰めた仁に千里がクスクスと笑みをこぼす。

「これ・・・？福集屋R？という探偵事務所の名詞なの。ちよつと依頼するのにコツがいるんだけど、腕は確かよ。私の依頼した15年近く前の事件の真相を見つけて、尚且つ犯人に自白をさせたんだから」

仁の顔がパツと輝いた。15年前の事件を解決できるのなら、6年前の真相を探ってもらえるのかも知れない。

「行ってくる・・・つと、会うのにコツがいるって言ってただろ？それって何？」

「喫茶店リバーズに行くと、メニューを届けてくれるから、《メニューは結構です。》って言いながら、名刺がプリントアウトしたこのくらいのチケットを見せればいいの。ここ、一見さんお断りで、紹介が無いと入れないから」

千里は言いながら指で長方形の形を作って見せた。それを見た仁は再び名刺に目をやってから入口に向かう。だが、その途中、何かを思いついたかのように振り向いた。

「千里。感謝する」

尊大に笑う、その表情が仁の魅力である事は疑いようも無いが、同時に恐怖を相手に与える。かといって彼の外面を見たいとも思えないが。普段との違いに鳥肌が立つ。

「んー。行ってらっしゃい」

ひらひらと手を振った千里は、まるで自分の家みたいだな・・・等と思いつつもその思考はすぐさま放棄した。千里にとってどうでもいい事なのだ。

喫茶店リバーズは小さくて可愛らしい店だった。女の子が好みそうな外観と2階部分が住宅となつて居るのか洗濯物がはためいている様子に入るのを一瞬躊躇した。男1人で入るのには勇気がある外観だ。事実、店にいる客は大抵女性客かカップルだ。だが、これがあの事件の真相を知る唯一の手がかりと勇気を奮い立たせて扉を開けた。

「いらっしやいませ」

にこやかに声をかけてくる店員に目をやり、案内された席につくと直にメニューを差し出された。

「メニューは要りません」

小さな声と共に名刺を差し出すと、女性定員は小さく眉を顰めた。そのまましばらくの時がたつ。もしかしてここでは無いのだろうか・・・と冷や汗をかいた仁の前で店員がニッコリと笑みを浮かべた。

「少々お待ち下さい」

名刺を片手に奥に引っ込むと、直に紅茶を手にして戻ってきた。

「紅茶は飲まれますね？」

確認に頷くと、直に女性定員は奥に引っ込む。その紅茶のカップに一枚の紙が付いていた。

【右手奥にお手洗いがございますので、そちらにお越し下さい。】

他の客に見つからないための用心なのだろうが、あまりの秘密主義に仁が軽く目を見開く。

だが、事務所のあり方を一々気にするのは客の仕事ではない。客である仁にとって仕事をしてもらえればそれでいいのだ。

周りの目を気にして、さりげない風を装いながらお手洗いに足を向ける。これで、漸く6年前の事件の真相がわかると思うと、心臓が高く波打った。

6年前、仁が16歳の時に16歳の離れた兄が殺された。犯人も動機も何もわからなかった。警察でさえ匙を投げた事件。でも、兄に育てられたといっても過言では無い仁にとって兄の死の真相は絶対に手に入れないものだった。高校時代から様々な探偵事務所をあたってきたが、高校時代には子供の依頼は受けないと突っぱねられ、大学に入ってからは何年も前の事件を調べるのは無理だといわれて突っぱねられた。ここ「福集屋R」が、最後の砦。決して諦めるわけには行かない。

強い決意を胸にお手洗いの前まで来た仁は、自分より幾らか年上に見える女性の姿に何故か安堵を覚えた。なんとなく信用できる・・・そんな雰囲気をかもし出している女性だ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9902x/>

---

過去の鎖

2011年10月28日14時10分発行